

## 一九二〇年代前半の河上肇

―「社会問題」の研究を中心に―

原 朗

講師紹介 松野周治世話人代表

原朗先生は1939年東京市生まれで、近現代日本経済史について研究されてきました。1966年東京大学大学院経済学研究科博士課程を中途退学して助手となり、東京大学大学院経済学研究科教授を長く勤められた後、東京国際大学経済学部教授をされています。

先生の近現代日本経済史、特に戦時経済の研究には、私も学生時代から勉強させていただいています。その他、戦後高度経済成長の研究、韓国の

研究者との交流など、多方面でご活躍されています。

先生は昨年、『日清・日露戦争をどう見るか―近代日本と朝鮮半島・中国』という新書をNHK出版から出されました。

『日清戦争』というのは『第一次朝鮮戦争』と呼ぶべきではないか」という指摘は、私も授業で使わせてもらっています。今年には日清戦争講和から120年、戦後70年ですが、日清戦争を通じて日本の対中国認識の転換が同書で強調されています。

本日の原先生の講演テーマは「1920年代前半の河上肇」です。1920年代前半、第一次世界大戦を経て「一等国になった」というような時期の直後、日本は戦後恐慌に見舞われ、さまざまな思想や運動が展開されるものの、30年代の誤りにつながっていきます。第二次世界大戦後、日本



は高度成長を実現し、70年代のオイルショックやドル危機を乗り越える中で、1980年代には「ジャパン・アズ・ナンバー1」とさえ言われたことがありました。しかし、バブルと90年代以降の失われた20年」といわれる状況が続く中、日本のアジア、中国認識が改めて問われているようにおもいます。もちろん、同じような面とちがった面の両方がありますが、1920年代前半に

河上肇がどのよう  
に研究を深めて  
いったのかを学  
ぶことは大変  
重要です。原先生  
よろしく願ひ  
いたします。

はじめに

### 『寶乏物語』と『寶本論入門』

ご紹介いただきました原でございます。私は土地制度史学会、現政治経済学・経済史学会という学会で中野一新先生に大変お世話になっておりまして、いまご紹介をいただきました松野周治先生にも同じ学会でお世話になっております。

今年の初めに世話人の松野先生から、今年の総会で講演を」というお話がございました時、これはもうお断りできないな、と観念をいたしました。河上先生に関して私は全く不勉強なのですが、そしてお集まりの皆様のように河上先生のことをすべてご存知の方々の前でお話できるようなことは何も無いのですが、東京の方にも河上先生に惚れ込んでいる者がいるな、という程度のお話でよければ、ということでお引き受けしたような次第でございます。

お配りしたレジ ユメのはじめに、『貧乏物語』と『資本論入門』と書きましたが、これは私と河上先生との個人的な巡り合いの体験で、高校二年の時に『貧乏物語』を読みました。たいへん感動いたしました、もし大学に進むことができるなら、経済学部に行こう、と思いました。感動した理由はとても簡単なことでして、自分の家が貧乏だったものですから、貧乏をなくすにはどうすればよいか、経済学を勉強すれば判るだろう、と思ったのです。

なんとか大学に進むことができました、一年の時に読みましたのが『資本論入門』でした。大学に入ったら『資本論』を読もう、高校の時からそう思っておりましたが、なかなかよく判る解説書がない、困っていた時に巡り合ったのが、やはり河上先生の『資本論入門』でした。この親切な本を頼りに『資本論』第一巻を読み終った時の感

動は、今でも忘れることができません。苦しい上り坂をなんとか登りきったとき、サーッと目の前が急に開けて、前方の山脈の連なり方をクッキリと見晴るかすことができる、二度とない経験をその時に味わったと思います。その時から私は河上先生に私淑してまいりました。自分の事はこれくらいにいたしまして、今日申し上げるお話に入りたいと思います。

何を申し上げようかと悩んだのですが、河上先生の波乱万丈の生涯を一度で全部語りつくすことはできませんから、今日は一九二〇年代前半の河上先生、お歳でいえば四〇歳代前半の河上先生について、少しお話してみようと思います。

そう考えましたのには、三つの理由がございます。一つは、杉原四郎先生が、自叙伝としては、内容的に彼の一生のある時期（一九〇八年に京大に赴任してから一九二四年頃まで）の叙述が非常

に少ないというギャップ」が存在する『河上肇全集』続⑦459、自叙伝「下」解題」と指摘しておられます。その期間は一六、七年くらいになると思いますが、その中で最後の方の五年間、ほぼ一九一九年から一九二四年まで、河上先生四〇歳〜四五歳の時期に注目したい、と考えました。

二つ目に、『貧乏物語』(一九一六・九・一二〜一二・二六連載・一九一七・三刊行)のころの河上先生に関してはよく知られていますので、『貧乏物語』よりも後の時期を考えることにしたい。第三に、一九二四 大正一三 年という年は河上先生にとって大きな転換点を迎えられた年で、いわゆる「新たな旅」(一九二四・六)の決意を述べられた時期ですが、そこから後は割合よく知られておりますので、今日は簡単に触れるだけにしたい。こうして結局一九一八、九年ごろから一九二四、五年あたりまでのことをお話ししたいと思います。

います。

河上先生がお亡くなりになるわずか一カ月前(一九四五・一二・二七)の言葉に、余が精神的活動の最も旺盛なりし、生涯の中核とも謂ふべき、壮年期約四分の一世紀間にわたる思ひ出を、時代の順を追うて書き綴る」(大牢後の秋)識語、小菅の四星霜 獄中の回想』『改造』二七二、一九四六・二・一 続⑥206)という言葉がありますが、その四分の一世紀の中の、さらに五分の一に当たる五年間について振り返ってみようと思うわけです。

## 1 河上肇と 社会問題

### — 一九一九年の転回点 —

一九一九〜二四年の間、河上先生の学問がどのように進んでいったのか、今日の私の話の要点を先回りして申し上げておきますと、一九二四年六

月、新たな旅」に出るといいう大転回点の前に、一九一九年と、一九二二年という二つの年に河上先生の学問の転回点があり、そのことが相当重要な意味を持っていたのではないかと考えるのです。

河上先生は、一九一九年一月から『社会問題研究』という個人雑誌を発刊された、これがやはり大変重要だ、と思います。これが実物の第一号で、回覧いたしました。先生はその前年一九一八年の九月に、『社会問題管見』(弘文堂)という論文集を出しておられ、その両方に同じく『社会問題』



という言葉を使われた、そのことに注目して少し考えてみたい、これが今日のお話の

趣旨でございます。

テーマの副題に「社会問題」の研究を中心に付けております。これは『社会問題研究』の研究という意味ではなく、河上先生をめぐるその当時の『社会問題』についての検討を試みる、ということでございます。

### 河上肇と『社会問題』

では『社会問題』とは何か、ということですが、この言葉は非常に早く、明治二〇年代から新聞などで使われていますし、現在でも使われています。関連する言葉として、『社会政策』『社会主義』『社会改造』『貧困問題』『労働問題』などがあります。が、当時の経済学を中心的な学会は社会政策学会という名前でした。『社会主義』の主張は河上先生をはじめ色々な方により入ってきました。『社会改造』という言葉は、戦後の『革新』という言葉

にあたるのが戦前では「改造」という言葉でしたから、「社会改造」というのは左翼的なイメージが強かったのです。戦前の「革新」という言葉は右翼的な言葉でした。最後の「貧困問題」と「労働問題」の2つは、河上先生がおっしゃる「社会問題」と意味が重なることが多いと思いますが、何よりも先に、先生ご自身の用語法を追っていくことにいたしましょう。

今日の話より前にある『貧乏物語』でも、当然ながら「社会問題」という言葉は出ています。引用しますと、「貧乏問題は一見すれば分配論に局限されたる問題の如くにして、実は生産問題と密接なる関係を有するものなる事を看取するに足るであらう。思ふに世上社会問題を論ずるもの往々之を以て單純に富の分配に関する問題と爲し、其の深く現時の生産組織と連絡する所あるを看過する者頗る多し」『貧乏物語』中編 何故に

多数の人が貧乏して居る乎」末尾 ⑨64-65」とあります。社会問題を富の分配問題として捉え、生産問題との関連を軽視していることを批判しています。

これは『貧乏物語』中編の最後の方に出てまいります。下編では、当時の河上先生の考えで、自分が天下の為に万人に代つてその財産を管理して居ると云ふ信念の下に、金を貯めて居るのならば、少しも差支ないことだと思ふ。その代り斯かる信念を有する人々は、いくら金を儲け、いくら財産を拵へても、之を一身一家の奢侈贅沢には使はない筈である。思ふに此の如くにして始めて一切の社会問題は円満に解決され、又始めて実業と倫理との調和があり、経済と道徳との一致があり……同、下編 如何にして貧乏を根治し得べき乎」⑨110-111」という意見です。財産あるものが奢侈贅沢に走らず、信念を以って社会に貢献すること

により社会問題も円満に解決される、という当時の河上先生の見解です。『寶乏物語』では「社会問題」はこういう形で表れていました。

『寶乏物語』発刊の年、一九一七年前後の社会の状態をちよつと見てみますと、一九一〇年の大逆事件以後ずっと逼塞していた日本の労働運動が一九一七年から一九二一年にかけて急速に盛り上がり、大きなストライキが次々に起きて、大争議段階」と呼ばれる状況になりました。一九一七年のロシア社会主義革命の影響もさまざまな形で伝わってきはじめました。

そして一九一八年夏の、日本のほとんどの地域に及んだ米騒動の大きな衝撃が社会的背景として非常に重要です。

そこで、河上先生の米騒動についての発言を見てみますと、「米価問題所見」(大阪朝日新聞)一九一八年八月一八日(二四日)ですが、これは杉

原先生が編集された『河上肇評論集』(岩波文庫)に収められています。

先生は、八月二二日の新聞で、吾輩は、今回の事件を以って、単に米価問題と看做さずして、それは日本全国に瀰漫せる経済的弱者の不平が、偶米価問題でふ具体的の形態を以て爆発したるに過ぎざるものと觀念し、所謂社会問題が今日の日本に於て如何に現実の問題と為りつゝあるかを、十二分に看取る所あらんを希望する」(486)と、「社会問題」が現実化しつつある、と捉え、二四日の新聞では、吾輩は、啻に社会問題乃至労働問題の論議のみならず、之が實際運動に就ても、今後は大に之を自由にするの必要ありと信ずるものである」(489)としています。

この論説は先生がいつも論陣を張っていた大阪朝日新聞に連載されたものですが、連載が終わった翌日の二五日の大阪朝日新聞で「白虹事件」

という大事件が起こります。米騒動に関連した記事の「白虹日を貫けり」という表現が問題になりました。白い虹が太陽を貫く」という故事は、のちに始皇帝となる秦王を暗殺するよう命じられた刺客の荊軻が発したときにおきた現象だとされますから（『史記』鄒陽列伝）、日は始皇帝を、白虹は凶器を暗示し、君主暗殺の兆しを示す表現で天皇への不敬にあたる、と大問題となりました。大阪朝日新聞の社長も替わり、一〇月一五日、編集局長・鳥居素川、社会部長・長谷川如是閑や大山郁夫など進歩派は退社となりました。同新聞の社友として執筆していた河上先生も、これに同調して大阪朝日と縁を切られました。

この事件は、ジャーリズムが権力に屈服している重要な画期となるのですが、その結果、先生は社会一般への論説の発表機関を失うことになり、これが翌一九一九年一月の個人雑誌「社会問題研

究」の発行に進む前提となるわけです。

その前に、一九一八年九月の「社会問題管見」の初版で「社会問題」という語はどう用いられているかを見ておくこととしましょう。

この本の中で大きな比重を占めているのは「婦人問題雑話」という論説で、これは実は「貧乏物語」が連載されるよりも一年早く大阪朝日新聞に連載されていたものです。そこで先生は、現代の二大問題の一は貧富の問題で、二は男女の問題である（『大阪朝日新聞』1915.10.11・11.1）「管見」10）⑨236-285「河上肇評論集」所収）とされています。

この考えは、ずっと早く、一九〇五年、明治三八年八月の「将来の三大問題」にすでに示されており、余輩は本邦経済界の将来を観測して三大問題の解決すべきものあるを思う。其一は農業者対商工業者の問題なり、其二は資本家対労働

者の問題なり、其三は男子对女子の問題なり」男子对女子の問題は、：其一は男女交際の問題なり：其二は女子就職の利害問題なり（「将来の三大問題」1905.8.10②406）。第一の農業者対商工業の問題、これはこれで非常に重要な問題で、明治中期から大きな論争がありましたけれども、それを二応括弧に入れれば、婦人問題雑話」における貧富の問題と男女の問題、という二つの問題になります。今日の社会では貧富の懸隔が益々甚だしくなり、其結果所謂社会問題なるものが、諸国に於ける大問題の一と為りつゝあるのである（⑨257）とも言っておられます。

この「社会問題管見」を、先生は半年後の一九一九年四月に非常に大きく構成を変えて改版されました。内容がほとんど入れ替えられています。巻頭の「マルクスの『資本論』」大阪朝日、1917・10・15・10・17「管見」1⑨132）や婦

人問題雑話」など少数の論説は削除されなかったのですが、他のほとんどのものは削除されました。これは、半年前には本に入れていたご自分の論文が気に入らなくなったから新しく書いたものを入れ替えたのだと思います。この「社会問題管見」の改版が一九一九年前半のことである、ということに注意しておきたいのです。

たとえば、一九一八年一月二日大阪朝日の「未決監」という文章は削除されました。⑨210①219）、その末尾に、あまり注目されない歌ですが、河上先生の歌として私は大事な歌だと思つてゐる「今もなほ惑ひに惑ひ重ねつゝとしのみ不惑の数に入りける」という歌が入っていました。不惑の年に、年のみ不惑だけれども、俺はまだ惑ひに惑つてゐる。「社会問題管見」の初版と改版のゆれ方の激しさを見ますと、この論文自身も削除されたのですが、色々なことを考えておられたのでは

ないかと思えます。

このころ、社会問題がさまざまな形で浮かび上がってくる気運が生じました。一九一八年末から二〇年秋にかけて、あとで取り上げる高野岩三郎という統計学者が、丹島労働者家計調査」という先駆的な職工実地調査をやっています。また、これもあとで取り上げる福田徳三が、一九一八年末に吉野作造と「黎明会」という団体を作って活動しています。

白虹事件のあと発表機関がなくなった先生に對して、小島祐馬さんと、櫛田民蔵、この方もあとで触れることになりましたが、小島・櫛田の二人が相談して先生には黙ったまま、『貧乏物語』を出版して大きくなった弘文堂書房に話をし、河上先生の書いたものだけを載せた個人雑誌『社会問題研究』を發刊することになりました。一九一九年1月20日『社会問題研究』第一冊、く第一〇六

冊、1930年10月5日まで

その第一冊の「序」社会問題に對する著者の態度及び立場)では、抑々社会問題とは何であるか。簡単に言はば、社会の大多数の人々が貧乏して居る、其を如何にして救済するを得るかと云ふこと、それが即ち今日謂ふ所の社会問題である」と二行でスパッと定義します。譬へて言はゞ、今日の社会は、貧乏といふ大病に冒されて居る所の、痩せ衰へた病人の如きものである。然らば此の病氣は如何にして之を根本的に治療することを得るか。『社会問題研究』は即ち此問題の解決に就て、余が若干の読者と繼續して共同的思索に耽らんが為め、新たに起せしところの思想的機関である。社会問題は今後の世界に於ける最大問題の一である。余は社会問題に就て何等か危険なる思想を有し居る者なるかに、或一部の人々に依つて、信ぜられて居るかと思ふ。併し」余の思想は、

仮ひ社会の或一部の人々の利益の為に危険なるものであるにしても、社会全体の利益の為には決して危険なるもので無いと確信して居る」余は社会問題に就き自己の抱懐する所を、何等留保する所なく、総て露骨に、之を説明するを憚らぬ者である」と言っておられます。余は社会問題の根本的解決といふ事を最後の標準として、一切の社会政策を批評すると同時に、更に人間の道德的完成といふ事を最後の標準として、社会問題の根本的解決の為の実行手段を是非するであらう」というわけです。しかし河上先生らしいところは、大間は無病でさへあれば其で可いといふ訳では決してない」大生の目的は各自の道德的完成にあらねばならぬ」それ故私は、此叢書に於ても、時折人生といふ事を考へるであらう」『研究』第一冊8頁、空集』(10221)というあたりです。

河上先生自身の後の回想では、小島祐馬さんの

書簡(1918年12月4日、『冒叙伝』続⑤236、文庫版1187)を引き合いに出して、大正八年の一月から私の個人雑誌『社会問題研究』を出すようになったのは、恐らくその頃、真理の方向はここにあるという見込をつけ、分からぬなりにマルクス主義を宣伝しようと思つたに至ったからであろう。『資本論』に齧りつくようになったのも、大体その頃ではないかと思われる」続⑤235、6、文庫版1186) 大体大正八年頃が、私にとつては一期を劃するものかと思われる」続⑤237、1188) ブルジョア経済学に見切りをつけ、腰を据えてマルクス主義経済学の勉強を始めたのは、雑誌『社会問題研究』を創刊したところである」とも云っておられます。

ところで、小林漢二という方のご研究によりますと、河上先生のこういう後年の回想に頼らずに、河上先生はその時期に発表されたお仕事の方に

即して研究した場合、転回期は 実際には、それより二・三年ほど遅い一九二二年の頃のことであると、考えざるを得ない」とおっしゃっておられます。『河上肇』法律文化社、1994・3 213頁)

私としては、少し違う考え方もできるのではないかと思います。『社会問題研究』を創刊されたこの一九一九年、満四〇歳の時の河上先生のお仕事をみてみますと、四月一日に『社会問題管見』の大幅な改版に踏み切られました。これは相当大事なことです。

初版の『社会問題管見』のほとんどの論文を入れ替えてしまった上で、少数の論説を補い、『賀乏物語』の上編と中編のみと合わせて『改版社会問題管見』として、お書きになった序文も製本段階で削除されました。

五月には『賀乏物語』も第三〇版を最後に、つ

いに絶版とされました。

これも相当な決断であったと思われます。八月には信濃木崎夏季大学に出講され、これは翌年三月に『近世経済思想史論』として出版されます。社会問題に関する根本主張の流れ」を知ってほしい、というのが先生のその時の望みだったわけです。

この一九一九年というのは河上学説の重要な転換点の一つととらえた方がいいのではないかと私は感じております。そして一〇月には『社会問題研究』第九冊に『福田博士の社会民主主義論を評す』を発表されました。こう見てまいりますと、私としましては先にご紹介した小林漢二氏の説と少し違って、一九一九年は河上学説の重要な転回点の一つだと考えるのです。

この年の終り、社会主義者の大御所とも言うべき堺利彦氏が、雑誌『改造』の1919年12月号

福田・河上博士論戦評」特集 別232)で、福田時代から河上時代へ」という文章を書きました。

大正八年 (一九一九年) の前半期は福田時代の全盛期で河上時代の醞釀期」であり、後半は河上時代の興隆期で福田時代の衰亡期」だと述べています。山川均も同じ『改造』の翌年三月号に『河上福田問題』の総勘定」を書きました。

福田徳三と対比せずとも、河上肇個人の学説の進展のみから考えても、『社会問題研究』の発刊、その第1冊からすぐ、マルクスの社会主義の理論的体系」の七回連載を開始、『社会問題管見』の本を大幅に改変、『貧乏物語』を絶版にする、これらの大きな決断を河上先生が次々になさっていることを考えますと、やはり一九一九年という年、とくにその前半は、先生のご研究にとって大きな転回点をなしている、と考えたいのです。

なканずく『社会問題研究』という月刊の個人

雑誌を一月から刊行しているということは、前年の一九一八年後半あたりから、相当重要な意欲的かつ内発的な転回が進行していて、一九一九年に一気にそれが爆発したのではないかと感じるのです。

## 2 高野岩三郎と河上肇

### — 1920年代前半の社会問題 —

ここからは、四人の同時代の人物、高野岩三郎、難波大助、福田徳三、榎田民蔵という四人を取り上げ、彼らと河上先生との一九二〇年代前半における関係を見ることにより、その時期の河上先生の学問がどう展開されていったかを跡づける、という進め方をしてみたいと思います。いわば論争相手などの鏡に照らして見て、河上先生がどう見えて来るかという話です。

まず高野岩三郎と河上肇について。高野岩三郎

は、河上先生とはあまり関係がなかったと思われるかも知れませんが、東京商科大学の福田徳三、京都帝大の河上肇と並んで、東京帝大の高野岩三郎は、当時の経済学の代表的な人物の一人でした。私が今日取り上げている「社会問題」との関係で申しますと、大原社会問題研究所の所長として、一九二〇年代を通じて大きな役割を果たした人物です。この研究所は現在でも法政大学大原社会問題研究所として活動しておりまして、「社会問題」をその名に掲げる研究所として最も古い歴史を持つ研究所です。

当時は「社会問題」といえば、相当警戒されていましたから、研究所の名前に「社会問題」と入れるかどうかについてはかなり議論があったようです。この名前で創立され初代の所長になったのが高野岩三郎という人でした。

この研究所は、大原孫三郎 1880.7.28

1943.1.18、63歳）という倉敷紡績の社長が大金を出資して設立したのですが、この大原孫三郎を高野岩三郎に紹介したのが、ほかならぬ河上先生でした。大原社研に河上先生の名刺の紹介状が残っておりまして、『河上肇全集』の24巻580頁に記録されています。

一九一八年九月頃には京都帝大の河田嗣郎や米田庄太郎も協力し、一九一九年二月に「大原社会問題研究所」の創立総会が開かれました。当初の陣容では、高野、米田、河田が委員となっていました。例の国際労働会議（ILO）の労働者側代表を高野がいったん引き受け、鈴木文治たち労働者側がこれに反発した結果、高野はそれを辞退し、責任を取って東京帝大も辞めるといふ事件がありました。その結果、高野は一九二〇年三月から大原社研の所長になったわけです。

その少し前の一九二〇年一月に、「森戸事件」で

東京帝大の森戸辰男とその論文「クロポトキンの社会思想の研究」を掲載した『経済学研究』の編集発行責任者大内兵衛が休職になり、これに同調する若手研究者も辞職する、その結果、大原社研の研究員に東京帝大の人たちが多くなる、ということになりました。

このあたりの成り行きは定かではないのですが、河上先生は当初三月頃には「京大を辞めて大原社研に移ってもいい」というようなお気持ちで櫛田を通じて高野に伝え、高野は非常に喜んだ、とも言われるのですが、その時には話はまとまらず、六月に研究所の評議員になっておられます。

少したって一〇月三日に高野は、河上肇と長谷川如是閑に大原社研入所を勧誘しました。その月の二〇日に河上先生は高野・櫛田を訪問し、研究員の就任は六か月ほど待ってほしいとおっしゃり、大原社研への移籍は実現しませんでした。

一九二二年二月、大原社研は財団法人に改組され、高野は常任理事になります。河田、米田は評議員を自然解職となりました。そして一九二三年秋、河上先生は河田嗣郎・米田庄太郎両氏を嘱託とする条件で委員ないし研究員に就任してもいいとの意向を伝えますが、これは研究所側が断って、結局河上先生が大原社研でお仕事をなさることは実現しませんでした。ただ一つ、一九二八年八月の大原社研編『資本論初版首章及附録』原文対訳』弘文堂書房、同人社書店）河上肇訳）のお仕事は、河上先生と大原社研が協力してできたものです。

こうした事情の背景は、やはり財団法人改組の時の事情を河上先生が考慮して、ややぎこちない形で話が屈折していったのかと推測されますが、それ以上の憶測は差し控えておきます。

もう一つ、これも推測にとどまるのですが、戦

後長らく法政大学の大原社研で精力的にお仕事をされた二村一夫氏が、大原孫三郎が社会問題研究所をつくろうと思ったのは、実は河上先生の『寶乏物語』を読んで感動したからではないかと推測しています。いくつかの状況証拠を並べておられるのですが、もしそうだとすれば有産者が私財を投じて社会問題を解決すべきだという『寶乏物語』の目的は、見事に金的を射たことになる、というわけです。ただ、残念ながら状況証拠以上のはっきりとした証拠は今のところございません。

大原社研は毎年、『日本労働年鑑』を発行し、一九二〇年代の労働運動や社会問題の息吹を感じるためには不可欠の材料を提供してくれています。高野岩三郎も、研究所の所長として、所員による研究水準の向上に務めるとともに、無産労働運動への協力を惜しまず、大きな役割を果たしま

した。一九二〇年代末から二〇年代前半にかけての社会問題を考えようとする今日の私の話にとりましては、やはり欠かすことのできない人物なのです。

また、大原孫三郎も、大原社研だけではなく、一九一四年には大原奨農会農業研究所、一九二一年には倉敷労働科学研究所を設立しており、また、紡績女工が病気になることをどう防ごうかと考えて、一九二三年に倉紡中央病院を設立します。病院に入らないで済むように、労働科学研究所もつくったわけです。一九三〇年には、大原美術館をつくっています。

### 3 難波大助と河上肇

#### ―「断片」発禁と虎ノ門事件―

話の本筋からは少し外れるのですが、一九二〇年代前半の河上先生との関連では、難波大

助という山口県の青年に触れる必要もあろうかと思ひます。この青年は、河上先生が最初の発禁処分にあつた「断片」という雑誌論文、「改造」という雑誌の三周年記念号の巻頭論文ですが、それを読んでもたいへん強い影響を受け、摂政の宮、のちの昭和天皇をステッキ銃で狙撃しました。鹿ノ門事件”と申します。

話は、一九二〇年一月二九日から十二月二〇日過ぎまで、河上先生が脇村義太郎先生の叔父様やお父様のお世話で紀州田辺に転地療養をなさつたことに始まります。先生はお暇があつたので、サククという人の『露西亞社会民主主義の誕生』という本をお読みになり、興味を感じて「断片」という文章を書かれました。その内容は、死んだKという人物が残した七つの断片のメモを読んで、SとBとが感想を述べる、という形式で、一九〇五年ロシア革命で活躍した人物たちについ

て描写したものです。Kは幸徳秋水、Sは堺利彦、Bは馬場胡蝶ではないか、などと取りざたされたと言われますが、それはわかりません。

「断片」の内容の、政府が威嚇政治を思ふ存分に実行してゐる限り、平和な手段では何事も出来ぬと云ふことを確信するに至つた彼は、次第に平和なる運動者からテロリストに変わつて来た”

⑪ 318) などの表現が過激だと思われたのか、この文章を載せた『改造』は発禁になりました。河上先生が初めて受けた発禁処分です。

同じところに、出来得る限り暴力の作用に待たずして歴史の進行をさせたいと云ふのが、彼れの最も熱心なる希望であつた。彼れは歴史の進行を円滑にする…ために多少でも貢献することが、自分の使命だと云ふことを考へてゐた。社会問題が世間の注意を惹くやうになつてから、彼れの書いた多くの物は、殆ど皆、さういふ志願から書か

れたものだ」(⑩322)という表現もあるのですが。発禁は月半ばからでしたので、相当数の雑誌は書店から流布されておりました。

この「断片」を読んだ難波大助が、一九二三年二月二七日に当時は摂政であった昭和天皇を東京の虎ノ門でステッキ銃を用いて狙撃しました。そのため第二次山本権兵衛内閣は即日総辞職します。こういう言い方はちょっと穏当ではないかもしれません。先生の言論の力は、大助の行為を通じて天皇・摂政の生命を脅かし、少なくとも内閣をひとつ倒すほどの力があつた、ということになります。大助は大逆罪で死刑判決を受けてすぐ執行されたのですが、その難波大助の訊問調書には、河上先生の「断片」を読んで決意を固めた」と記されておりました。

幸徳秋水などの大逆事件については大分研究されていますけれども、この虎ノ門事件について

は事件の名前の付け方が「虎ノ門」という狭い地名になっているためか、余りよく調べられてはおりません。例の一九〇五年の日露講和条約反対運動の「日比谷焼打事件」というものも、戒厳令を布いたぐらいいですから、実態は「東京市内焼打事件」とか「帝都騒擾事件」とでも言うべきところ、事件を小さく見せるために「日比谷」焼打事件といったのと同じようなことかもしれません。戦前日本で戒厳令が敷かれたのは三回だけ、この日比谷焼打事件と、関東大震災、そして二・二六事件の三つです。虎ノ門事件では戒厳令は敷かれませんでした。大逆罪で処刑されたのは大逆事件に次ぎ二番目の例でした。

この事件をめぐる一部始終については、先生はのちに『随筆「断片」』で書いておられます。大助が事件より前に河上先生のお宅を訪ねていたこと、父親が衆議院議員だったこと、処刑後の埋葬をし

た人が獄中で先生にその模様を話したこと、法廷における大助の態度が大審院裁判長の横田秀雄を感心させたこと、などは先生の『随筆 断片』<sup>1)</sup>で有名です。この文章は『愚い出』にも『官叙伝』にも収められております。

判決の際に叫んだ大助の言葉が 日本無産労働者、日本共産党万歳、露西亜社会主義ソビエト共和国万歳、共産党インターナショナル万歳」だったことなども別の記録にあります。

作家の永井荷風は河上先生と生まれた年が同じですが、『荷風の日記 断腸亭日乗』の大助の処刑の報について記した内容も注目すべきものです。十一月十六日。日曜日。快晴。都下の新聞紙一斉に大書して難波大助死刑のことを報ず。大助は客歳虎之門にて摂政の宮を狙撃せんとして捕らへられたる書生なり。大逆極悪の罪人なりと悪むものもあれど、さして悪むにも及ばず、また驚

くにも当らざるべし。皇帝を弑するもの欧州にてはめづらしからず。現代日本人の生活は大小となぐ欧州文明皮相の模倣にあらざるはなし。大助が犯罪もまた模倣の一端のみ。洋装婦人のダンスと何の扱ぶところかあらんや。」(『摘録 断腸亭日乗』上巻、岩波文庫、1987・7)。

幸徳秋水たちの大逆事件に対して、ドレフュス事件のゾラのような勇氣ある言論ができなかった、そのことを文学者としての恥と感じて、自ら江戸時代の戯作者と同じように生きるという態度決定をした荷風の、いわば芯の通った観察だということもできるでしょう。

この『断片』執筆当時の河上先生のお仕事に戻りましょう。一九二二年正月の『学生と社会問題』で、今日の本当の政治問題はつまり社会問題なのだ。明治の前期における政治問題の中心は、自由民権の主張にあった。さうしてそれが当時の危険

思想であつたのだ。…維新の革命が目的としたブルジョアの所謂自由民権はすでに確立され、歴史は一つの段落を終ると同時に、次ぎの階段に進まうとしており、従つて政治問題の中心も、今は所謂社会問題に移つて仕まつたのだ。若い者が社会問題に興味をもつといふことは、彼等が政治問題に興味を持つといふことなのだ、と主張されています。

また、三月の「心的改造と物的改造」では、先ほど申し上げた一九一九年の『賀乏物語』絶版・『社会問題管見』の改版の理由を説明されています。『賀乏物語』に於ても、私はスマアトの述べてゐたやうな人心改造論―道德的革命によつて社会問題を解決しやうとする議論―をば、頗る熱心に説いたことがある。叱るに其の後段々悟る所があつて、此の種の人心改造論には、余り重きを置かなくなつた。私が『賀乏物語』を絶版に附

し、次いで『社会問題管見』の紙型を破棄して、改版、社会問題管見』に改造したのは、主として是が為めである。『社会問題研究』第21冊、2頁）と言つて、心的改造論を原則的に放棄します。

#### 4 福田徳三と河上肇

##### ―1922年の転回点―

天野敬太郎氏の『河上肇博士文献志』 日本評論新社、1956・3）という本がありますが、これは大変有益な書物で、その中に「論争目録」という項があります。これによりますと、河上先生は全部で三十三の論争をなさっています。杉原四郎先生によりますと他にももつといくつか論争はあるのですが、天野説では三十三の論争のうち七つが福田徳三氏との論争で、その頂点がここで取り上げる「資本増殖の理法」論争とです。

天野敬太郎氏のお仕事をさらに緻密に丹念に

仕上げて下さっているのが内藤昭子さんの『河上肇博士関係資料目録』河上肇記念会)で、その続編も会報に連載されています。

福田徳三につきましては、金沢幾子さんという方が、二〇一一年一〇月に『福田徳三書誌』(日本経済評論社)という八八八ページもの大きな著作を刊行されています。この書誌を見ますと、福田徳三の側から見た河上肇の姿が大変よく分かります。この大作の序文の冒頭を見ますと、金沢さんにこの『書誌』の作成を勧められたのは杉原四郎先生だったということです。その本を見ているだけで福田徳三のことが分かったような気分になります。あくまで「気分」だけですが。内藤さんと金沢さんのおかげで、福田・河上というライバルの双方から勉強できる基礎が整えられたわけで、お二人のご尽力に感謝しなければいけないと思っております。

金沢さんの書誌に、福田徳三論争「批判索引」があります。これを見ますと、福田も三十三の論争をしています。一方的に批判をしただけというものも二十二あって、全部で五十五です。その内河上先生が関係する論争は二三、批判が三つです。一九二二年の秋、雑誌『改造』に二回連載された福田徳三論文は、マルクス再生産論を取り上げています。かつて「経済表」を作ったケネーを戴く重農学派は、人類の三大発明として、文字と貨幣と経済表を挙げましたが、福田徳三は、マルクス再生産論はこれに匹敵する学問上の大発見だと位置づけたうえ、主として、ツガン・バラノウスキーに依拠して資本主義はずっと持続する、という議論を展開します。

これに対し、河上先生は、翌一九二二年三月、雑誌『我等』で応酬されたのち、ご自身の『社会問題研究』第三十一冊から第三十四冊にかけて四

回連載で、福田博士の『資本増殖の理法』を評す」  
②38) という論文を発表し、マルクス再生産論の理解につき本格的な批判を加えられました。

私は経済学の理論は専門ではありませんので、大まかな内容についてだけお話をさせていただきますが、福田説がツガン・バラノウスキーの説に依拠して資本主義は永続説を主張したのに対し、河上説はマルクスの単純複生産・拡張複生産表式、今の用語では単純再生産と拡大再生産ですが、これらの表式と剰余価値実現の条件を検討し、主にローザ・ルクセンブルグの説を援用して資本主義の必然的行き詰まりを主張されたわけです。

次の世代で再生産論を専攻された山田盛太郎先生が、『再生産過程表式分析序論』(一九三二年九月)と『日本資本主義分析―日本資本主義に於ける再生産過程把握―』(一九三四年二月)を書かれました。河上・福田論争にふれ、再生産論をそ

のものとして日本で提示した最初のもの」が、河上先生の四回連載であると位置づけています。さらに、山田先生はお年を召してから、一九七九年一月の日本学士院創立百年記念講演「わが国における経済学発展の特異性」(『山田盛太郎著作集』第一巻286―7頁、300頁、岩波書店、1983・11)で、資本蓄積Ⅱ再生産論争がマルクス経済学理論の軸線にあたるもので、その劈頭の福田・河上両博士の論争は、二人がともに、わが経済学界で指導的位置にある巨匠であること、かつ、主題がマルクス経済学の基本構成の原理について真正面から論及しあっていること、この二点に鑑み、その論陣の重さが推察されうる」博士のマルクス経済学研究の行程における重要なエポックを劃するものであるとともに「わが国における理論経済学の発展の上でも、一つの時期を劃するものと見ることが出来る。」と述べておられます。

さて、さきほどの小林漢二先生の研究『河上肇…マルクス経済学にいたるまでの軌跡』 法律文化社、1994年3月、51頁、197頁)を見ますと、この論争がなされた一九二二年をもって河上先生の大きな転回点だとされ、先の一九一九年でもなく、あとの一九二四年でもなく、この一九二二年こそが大転回点だと、この二本では主張しておられます。河上先生がマルクス主義から遠かったところからどうやってマルクス主義に辿りついたかというご議論です。ただ、その後の論文では、もっと後の時期も大事だと言っておられるようにも読めますので、結論はやや慎重に保留しておいた方が良いのかもしれないと。

私といたしましては、この一九二二年も、さきの一九一九年と同様に、戦前の河上先生の学問の転換点として重要だったのではないかと思えます。ただ、その二年後、一九二四年六月に河上先

生は、櫛田民蔵氏の批判(社会主義は闇に面するか光に面するか)を契機に大きな転回点を迎えました。これは『官叙伝』でも繰り返し先生自身が強調され、学界でも通説になっていくわけですが、小林漢二氏はさきのご著書で、『官叙伝』などの回想によるのではなく、その当時の論文に客観的に示されている認識のみを根拠として評価すべきであると主張され、一九二二年こそが真の転回点で、一九二四年ではないと主張されていたわけです。回想よりも客観的な論文の内容に基づくべきだ、という方法にも、一九二二年に大きな転回点があるということにも、私は賛成していいと思います。しかし一九二四年の櫛田民蔵氏の批判による転回を無視することは、やはり少し無理があるのではないだろうか、というのが私のさしあたっての感想です。

## 5 櫛田民蔵と河上肇

— 1924年の転回点 —

さて、一九二三年八月に、先生は『資本主義経済学の史的発展』(弘文堂)を出され、利己主義から利他主義へとという大きな構図で、アダム・スミスの先駆者から始まり、マルサスとリカアド、ベントナムとJ・S・ミル、カアライルとラスキンにいたる経済学史をまとめ、巻末近くにラスキンの大胆に帷を揚げよ、光に面せ」(340)という言葉を投稿しました。これに対して櫛田民蔵が強い批判を発表するわけです。

有名な『河上肇より櫛田民蔵への手紙』という本があり、これと先生の『冒叙伝』と合わせて一般的なイメージが作られてきたのですが、櫛田氏が一九三四年十一月ご日に四九歳で生涯を終えた後、『櫛田民蔵全集』五巻が発行され、戦後にだいぶたってから、一九八四年二月に『櫛田民蔵・

日記と書簡』(社会主義協会出版局)という分厚い本が出版されました。この櫛田日記を見ますと、明治四二年四月六日の条に『河上先生を訪ふ。朝九時より午後三時まで、時を睨んで語る。先生の思想と余の思想は全く一致す。笠を傾けて旧知の如しとは其れ先生の如きか』という下りがあり、この日から河上先生と櫛田民蔵との長い親密な師弟関係が結ばれることになります。明治四五年三月一日条には『河上先生曰く『兀ての学者は文芸者なり、大いなる学理は詩の如し』と。』という言葉が記されています。櫛田はこれに感動しました。

こうして出発点では、河上先生も櫛田をととても尊重するし、櫛田も河上先生を慕うという関係でした。残念ながら、櫛田から河上先生の手紙は四通しか収録されていません。ご関係が深い方としては小島祐馬さん宛の手紙は六五通あり、親友の

権田保之助には一二三通、森戸辰男には七九通、いずれも権田のその時々息遣いが伝わってくるものです。

さて、河上先生の大著『資本主義経済学の史的発展』にたいして、先生の最初の愛弟子であり同時に最大の批判者でもあった権田民蔵は、社会主義は闇に面するか光に面するか」という論文を翌一九二四年七月に発表して、痛烈な批判をいたしました。河上先生はこれを六月には読んでいます。六月三〇日まで、和歌浦望海楼で静養していた時に権田から知らせもありました。

河上先生はその時に覚悟をお決めになって、素直にその批判を受け入れ、私は一本参った、という感じを、強く受けた、と同時に、私は大奮発をなし、これから一つ出直して、是が非でもマルクス主義の真髄を把握してやろう、と決意した。「これは一九三九年八月五日の回想（続⑤217）ではあ

りますが、私はこれを無視することはできないだろうと思います。

河上先生は最後に「おそらくこの時期は、その思想変遷の過程において、私が一生一度の大転回をなした決定点に相当するので、いわば、私のこのころの歴史において、たった一つしかなき大きな五十年にわたる波長のうねりが、まさに上り坂から下り坂に曲がる峠の頂点、カーヴの曲がり角に当たっていたのであろう。」（続⑤226）　ここまで河上先生におっしゃられますと、たいしたことじゃない」とは言えないと思います。

河上先生は大変謙虚で真剣な態度で、一大勇猛心をもって、本当のマルクス主義の理解に至るまで突き進むもうというものでした。旅の塵はらひもあへぬ我ながらまた新なる旅に立つ哉」という歌が、この時二四年六月和歌浦で詠まれたものであることは皆さまご承知の通りです。この時が先

生にとって 二生一度の大転回をなした決定点」であることは、先生の感懐を素直に受け止めてよいのではないかと私は思っております。

ただ、私の感想を少し申し上げておきますと、この時の大転回は、いわば他律的な性格を持っていたこと、つまり櫛田の批判によって、受身で大きく踏み切らされた、という性格が強いのではないかと。それに比べて一九一九年前半の転回点や、一九二二年の福田徳三との論争は河上先生の方から攻め込んでいくわけで、これも自律的な性格が強かっただろうと思います。一九一九年、二年と自律的転回をすでに二回重ねていたから、櫛田の批判による他律的な転回点に耐えることができたのではないかと私は思います。

一九二四年の「大転回」で踏み切ってから後の河上先生の精進に次ぐ精進の過程は、河上先生ならではの驀進と言うほかありませんが、櫛田民蔵

との論争ではやや守勢に回っている感があると思えますので、ちょっと申し上げておきたいと思えます。

この後で、河上先生はさらに福本和夫氏からも経験批判主義の批判―河上博士の「唯物史観と因果関係」を批判す」、『マルクス主義』三月号、経済学批判のうちに於けるマルクス「資本論」の範囲を論ず」、『マルクス主義』十二月号 1925・3・4) など、哲学の面でも批判を受けました。これに対しては一九二七年から二八年にかけて、唯物史観に関する自己清算」で反批判をなさいます。ただ、これは今日私がテーマとした「一九二〇年代前半」という時期を越えて「後半」に入ってしまうので、ここでは触れないことにします。

## 6 一九二〇年代後半の河上肇

―理論から実践へ―

その後の先生の足跡を急ぎ足でたどりましょ  
う。一九二六年初めに京都学連事件の関連で家宅  
搜索を受け、二六年九月には愛息政男さん、二七  
年三月にお父上が亡くなられ、悲しみの中で、唯  
物史観に関する自己清算」で福本批判をなさり、  
のちに『経済学大綱』となった一九二七年度講義  
で完全にマルクス資本論体系に即した構成に到  
達したものの、いわゆる三・一五事件の関連で翌  
二八年四月に京都帝大を辞職されます。

この時の先生の「辞職理由書」に感銘を受けた  
福田徳三は、笛吹かざるに踊る―労働党の解散  
と大学の圧迫―という文章を『東京朝日新聞』  
に一〇回にわたって連載し、当局を批判するとと  
もに河上先生の冷静さを讃えました。一九二八年  
に先生が京大を辞職されたことは何といっても  
先生の生涯で大きな区切りになっていると思ひ  
ます。加えて、同じ年の十二月には新労働党の結

成という実践面で大きく踏み出された年であり、  
今日の私の話もこの一九二八年末までを展望し  
たところで終わりたいと思います。

話をきちんと纏めることもできませんでした  
が、最初に申し上げました杉原先生ご指摘の『  
叙伝』には一九〇八年から一九二四年の記述が少  
ない、その最後の五、六年について見ますと、一  
九一九年と一九二二年という二つの年に注目し  
て勉強することが必要なのではなからうか、先生  
が人生の最後に近い一九四五年二月二七日に  
書かれた、あの 余が精神的活動の最も旺盛なり  
し、生涯の中核とも謂ふべき、壮年期約四分の一  
世紀間」、そのまた五分の一に過ぎませんが、二  
九二〇年代前半」という五年ほどについてお話を  
申し上げた次第でございます。

なお、榎田民蔵との論争や、高田保馬、福本和  
夫との論争などにつきましては、上谷繁之先生が

多彩な研究をなさっておられまして、この記念会でもご講演になり、『日本経済思想史研究』という学会誌にも論文を発表しておられます。先生が本日お見えでいらっしゃると思いますので、ぜひご教示ご指導を頂ければ幸いです。

レジュメの最後、余白に先生の「うた」をいくつか選んで記しておきました。

最初の「今もなほ惑ひに惑ひ重ねつゝとしのみ不惑の数に入りける」は数えて四〇歳を迎えられた元旦の歌、あまりよく知られていないかもしれないかもしれませんが、四〇代出発点の先生の心境を素直に歌われていると思います。

旅のちりはらひもあへぬ我ながらまた新たな旅に立つ哉」はみなさまご存知の通り、マルクスへの再挑戦のうた、荷をおろし峠の茶屋に告天子（ひばり）きく」は京大を辞職された時の句、たどりつきふりかへりみれば山川を越えては

越えてきつるものかな」という入党のうたも、あなうれしともかくにも生きのびて戦やめるけふの日にあふ」という敗戦の日のうたも大変有名な、先生の人生の節目々々を記す歌だと思えます。

面白いのはこの「戦やめるけふの日にあふ」と同じ八月一五日に、大きな饅頭蒸してほゞばりて茶をのむ時もやがて来るらん」と、大きな饅頭」が「一緒に飛び出してくることで、八月二三日には、うれしきは声高らかに只今と帰れる孫の声を聞くととき」と可愛いお孫さんが出てきます。

九月七日には、小さないほりに住みて大きな饅頭ほゞばり花見てあらむ」と、大きな饅頭」が次々に登場、一〇月三日には大好きなもの全部そろって登場し、老妻のこしらへくれし饅頭に抹茶を添へて孫のもてくる」というわけです。

『官叙伝』の最後に「饅頭の話」というお母様

くの長いお手紙があります。今日はたいへん至らない話でまことに恐縮ですが、私の話も饅頭にたどり着いたところで終わりにさせて頂きたいと存じます。

### 【参考文献】

- 小林輝次・堀江邑一・松方三郎・宮川實 『回想の河上肇』 世界評論社、1948.3)
- 住谷悦治 思想的にみたる河上肇博士…貧乏物語』以前』 教研社、1948.8)
- 作田荘一 『時代の人河上肇』 開頭社、1949.6)
- 松本仁 『河上肇の歌と生涯』 平書房、1949.7)
- 天野敬太郎編 『河上肇随想録』 河出新書、1956.3)
- 天野敬太郎 『河上肇博士文献志』 日本評論新社、1956.3) 補遺 東京河上会、1962、1974)
- 住谷悦治 『河上肇』 吉川弘文館、1962.1)
- 現代日本思想大系19 『河上肇』 編集・解説大内兵衛 筑摩書房、1964.2)
- 末川博編 『河上肇研究』 筑摩書房、1965.7)
- 大内兵衛 『河上肇』 筑摩書房、1966.7)
- 天野敬太郎・野口務編 『河上肇の人間像 付年譜・著作目録』 図書新聞社、1968.6)
- 住谷一彦責任編集 日本の名著49 『河上肇』 中央公論社、1970.10)
- 河上肇記念会編 『河上肇遺品展図録』 同会、1973.3)
- 大内兵衛 大島清編 『河上肇より櫛田民蔵への手紙』 法政大学出版会、1974.7)
- 復刻 『社会問題研究』12巻、別、月報 社会思想社、1976.9)
- 内田義彦 編集 解説 近代日本思想大系18 『河上肇集』 筑摩書房、1977.3)
- 田中文蔵 『河上肇研究の一側面』 私家版、1978.9)
- 京都大学経済学部 『河上肇文庫目録』 同、1979.3)
- 杉原四郎・一海知義 『河上肇 学問と詩』 新評論、1979.10)

- 京都大学 『経済論叢』第124巻第5・6号 河上肇  
 生誕100年記念号 1979.11・12) 杉原四郎 福田  
 徳三と河上肇、山之内靖 『改版社会問題管見』序  
 文」などを収録)
- 西川勉 『アルバム評伝 河上肇』新評論、1980.8)
- 山田洗 『河上肇』清水書院、1980.9)
- 住谷一彦編 『求道の人 河上肇』新評論、1980.10)
- 塩田庄兵衛編 『河上肇 貧乏物語』の世界』法律文  
 化社、1983.1)
- 塩田庄兵衛編 『河上肇 自叙伝』の世界』法律文化  
 社、1984.11)
- 河上肇全集』別巻 著作年表・年譜 岩波書店、  
 1986.5)
- 杉原四郎編 『河上肇評論集』岩波文庫、1987.6)
- 住谷一彦 『河上肇研究』未來社、1992.8)
- 杉原四郎 『旅人 河上肇』岩波書店、1996.10)
- 三田剛史 『廻る河上肇 近代中国の知の源泉』藤原  
 書店、2003.1)
- 杉原四郎著作集 Ⅲ 学問と人間 『河上肇研究』藤  
 原書店、2006.9)
- 河上肇記念会会報編集委員会 『河上肇博士関係資料  
 目録—1901 明治34)年—1979 昭和54)年—』  
 河上肇記念会、2012.10)、『内藤昭子氏作成。  
 内藤昭子 『河上肇博士関係資料①—③』『河上肇記  
 念会会報』82—109号、2005.5—2014.8)
- 小林漢二 『河上肇における 『唯物史観』解釈の変遷  
 過程』『松山大学論集』第2巻第5号、1990)
- 小林漢二 『河上肇—マルクス経済学に至るまでの軌  
 跡—』愛媛大学経済学研究叢書第6冊、1992.3)
- 小林漢二 『河上肇—マルクス経済学に至るまでの軌  
 跡—』法律文化社、1994.3)
- 小林漢二 福本和夫の 『河上学説』否定と河上肇の  
 『新たな旅』(上)
- 『愛媛大学法文学部論集 経済学科編』第28号、  
 1994.9)
- 上谷繁之 『河上肇の 『剰余価格』論—高田保馬との

論争を中心として」『学校教育研究』10(1999)

上谷繁之 河上肇の人物とマルクス主義経済学への

取り組み』『河上肇記念会会報』No. 69 2001. 2. 15)

上谷繁之 河上肇のロマン主義的マルクス論とその  
克服—榎田民蔵との論争からさぐる—」(1) (2)

(3) 『河上肇記念会会報』No. 101 2012. 1) (No. 102  
2012. 4) (No. 103 2012. 9)

上谷繁之 河上肇の『社会的意識形態』論—榎田民  
蔵・福本和夫との論争を中心として—」『日本経済  
思想史研究』第13号、2013. 3)

上谷繁之 「九二〇年代前半における河上肇の唯物  
史観把握」『日本経済思想史研究』第15号、2015. 3)

☆高野岩三郎

高野岩三郎著 鈴木鴻一郎編 『つばの尻 遺稿集』

法政大学出版社、1961)

大島清 高野岩三郎伝』岩波書店、1968. 3)

内務省衛生局編 『青島調査』光生館、1978. 3)

天原社会問題研究所五十年史』法政大学出版社、  
1971. 1)

天原孫三郎伝』同刊行会、1983. 2)

高橋彦博 戦間期日本の社会研究センター—大原社  
研と協調会』柏書房、2001. 2)

☆難波大助

虎ノ門ニ於ケル不敬事件ニ関スル調査』1925. 6

虎ノ門事件 難波大助訊問調書』

虎ノ門事件に就いて』横田秀雄博士述

我妻栄編 『日本政治裁判史録 大正』(第一法規、  
1969. 8)

難波大助大逆事件』増補版 黒色戦線社、1979)

続・現代史資料3『アナーキズム』みすず書房、

1988. 7) 小松隆二解説

原敬吾 難波大助の生と死』国文社、1973. 4)

岩田礼 『天皇暗殺 虎ノ門事件と難波大助』図書出  
版社、1980. 1)

中原静子 難波大助・虎ノ門事件・愛を求めたテロ  
リスト』影書房、2002. 2)

☆福田徳三

福田徳三研究会

<http://fukuda.lib.hit.ac.jp/index.html>

『経済学全集』(1925-1926) 1 『経済学講義』

(1907. 9-1909. 9) 2 『国民経済講話』(1917. 2 -

1921) 3 『経済史経済学史研究』 4 『経済学研

究』(1920. 1) 5 『社会政策研究』上・下 6 『經

済政策及時事問題』上・下(1926. 11 総索引・総目

次』

『黎明録』1919. 7 『暗雲録』1920. 12 『社会政策

と階級闘争』1922 『ルシ・エウキズム研究』1922

『社会運動と労銀制度』1922. 6

『福田徳三先生の追憶』(同先生記念会、1960. 5)

金沢幾子編 『福田徳三書誌』(日本経済評論社、

2011. 10)

☆櫛田民蔵

『櫛田民蔵全集』第1巻 『唯物史観』、第4巻 『社会

問題』改造社、1935. 5)

櫛田民蔵著・大内兵衛補修 『共産党宣言』の研究』

青木書店、1970. 12)

櫛田民蔵 『社会主義は闇に面するか光に面するか』

朝日新聞社、1980. 9)

『櫛田民蔵・日記と書簡』(社会主義協会出版局、

1984. 12)